

『罪と感謝』

ルカ 7:36~50

～感謝を忘れるな～

ヨハネ 12:1~9

義理堅く生きている人はどのような生き方をしているのでしょうか。身近な人で考えて見てください。「あの人は義理堅い」という人は、日頃から周りの人に対して心からの感謝ができていない人ではないでしょうか。そして、その感謝な出来事を忘れずに覚えている人ではないでしょうか。足りない所ばかりに目が向いている人は感謝ができなくなります。感謝ができないと余計に足りない所に目が向き悪循環になってしまいます。足りない所に目を向ける事は簡単ですが、自分に与えられている物に目を向けて感謝する事がなかなかできません。しかし、義理堅く感謝できる人の人生は自分の能力や立場を良く知り、「罪と感謝」がバランス良くセットになっています。「罪」というと犯罪を犯すなど、大それた事に思いがちですが聖書で言う「罪」は私達が生まれながらに持っている罪であり、また日々心にできる悪い思いや日々犯してしまう良くない行為も「罪」という言葉で表現されます。今日の聖書の箇所はルカの福音書とヨハネの福音書に登場するマリヤとイエス様の描写から「罪と感謝」とはどういうものなのかを見ていきましょう。マリヤはイエス様に対してなぜこのような行動をとったのでしょうか。本来なら姦淫の現場を取り押さえられて石打に合いそうになった程罪深く身分の低いマリヤはイエス様がいらっしゃる場所にも入る立場でもなく、マリヤにとって大勢の人の前で自分の姿をさらすというのはとても辛い事でした。それなのに自分の事を差し置いてまでなぜこのような事が出来たのでしょうか。マリヤは自分の罪を良く知っていました。今まで誰も赦してはくれなかった自分の罪を神様は赦して下さった。マリヤはただただこの事が嬉しかったのです。何よりも嬉しくて感謝していたので、「イエス様の為に何かしたい！せずにはいられない！」という感謝の気持ちが入ることの出来ない場に入るほどにマリヤを突き動かしたのです。多く愛する者は多く赦される事がマリヤを見ればわかります。「感謝」と「愛すること」は非常に良く似た近い感情です。あなたは今、本当に感謝できているのでしょうか。私達が「罪と感謝」を大切に多く愛し、多く赦される者になる為に**①謙った感謝**（ルカ 18:10~14）パリサイ人の祈りは神の御前に自分を義人だと自任し、他人と比較し見下すような祈りでした。一方収税人の祈りは自分が罪深い者である事をよく理解しており、神の御前に心から謙っていました。この二人のうち、義と認められるのは収税人だとイエス様は言っておられます。私達はどうか。パリサイ人のように「こうあるべきだ。こうでなければならない。」という凝り固まった思いになっていないでしょうか。**②感謝を記憶**。①ができた次は感謝を記憶する事です。良かった事をどんどん記憶していくといつも感謝が出来るようになります。神に愛されたダビデは詩篇 136 篇にも見られるように創世記に遡ってまでもどんな事にも感謝を捧げています。「主のよくして下さったことを何一つ忘れるな。」と言ったダビデのようにあなたの感謝を数えて下さい。ダビデが愛された理由はどんな時も感謝を捧げ、辛い時にも感謝を思い出せる者だったからです。感謝をすると祝福されます。**③種まきから感謝**。（Ⅱコリント 9:9~15）あなたには素晴らしいものがたくさん与えられています。与えられた分与えていますか？感謝できていないと与える事ができません。与えていないと与えられているものやこれから与えられるべきものが無くなってしまいます。イエス様に出会って私達の罪は赦されました。神は一度赦した罪は二度と思い起こしたりはしません。しかし、私達は自分の罪を忘れ去ってはいけません。だからと言って後悔する必要はありません。ただ感謝をする為に自分の罪に目を向けるだけです。パリサイ人のように人の事ばかり目に付いて自分の罪もわからない状態になっていないでしょうか。マグダラのマリヤのような心で神の御前に出れば自ずと考えなくても私達の心に自分の罪がはっきりと認識できるはずですよ。罪がわかれば心から主に感謝できます。パリサイ人のように指を指す人生ではなくマリヤのように罪を知り、赦された事に感謝を捧げずにはいられないような心を持ち続けて歩みましょう。